

一三〇年以来、ノルウェー王国では玉座をめぐって内乱が続いていた。とりわけ一一九六年からは、オスロ司教ニクラス・アルナソンとトロンハイム大司教エーリクが、新王朝を打ち立てたスヴェツレ王（在位一一七七～一二〇二）と対立するようになり、旗幟は鮮明となった。前者の派閥をバグラ（司教杖派、後者をビルケベイナル（白樺の足派）と言う。ビルケベイナルとは奇妙な言い回しだが、バグラ側が発した「貧しいお前たちの靴は、白樺の皮でできたものだろう」との嘲りを自称としたのである。

一二〇四年、ホーコンはオスロ近郊のヴァルタイクで、先代ホーコン三世の庶子として生を享けた。自らの勢力圏内に王位請求権のあるホーコンがいると知ったバグラは、追っ手をさし向けた。ホーコンの母インガは自派の拠点トロンハイムに息子を逃がそうと、彼の身を臣下に託した。悪天候の中、その任務を引き受けたのは、スキーに長けたトーステイン・スケウラとスケヴァルド・スクルツカの二人であった。彼らは、敵の目から隠れるために二歳の幼児を背負って山道を抜け、無事目的地にたどり着いた。ホーコン王治世の基本史料である『ホーコン王のサガ』はそう伝える。

一二一七年、ホーコンは十三歳でノル

ウェー王ホーコン四世として即位した。しかしながら実権を握っていたのは敵対派閥のスクツレ公であった。他にも我こそノルウェー王位の継承権ありと主張する者たちが乱立し、ホーコンの青年時代は落ち着かなかつた。時代が大きく舵を切ったのは一二四〇年である。この年、政界に甚大な影響力を行使していたスクツレ公が、度重なる内部抗争の末、この世を去ったのである。かくして一世紀以上にわたり続いた内乱は幕を閉じた。新しい時代に入った。

ここで少し時間をさかのぼってみよう。先ほどのノルウェー人物史「34～35頁」でハーラルド・グリンランド王というヴァイキング時代の最後を飾るノルウェー王について紹介した。彼とまではいかなくとも、この時代のノルウェー・ヴァイキングたちは冒険精神に溢れ、土地を求めて北大西洋に航路をとった。オークニー諸島を基点に、北はシエトランド諸島、フェロー諸島、アイスランドそしてグリーンランドまで、南はヘブライド諸島、ケイトネス、マン島を中心としたアイリッシュ海沿岸まで、ノルウェー人が植民した。だからこの地域では、しばしば女性が身につけたノルウェー製ブローチのようなノルウェー人の痕跡が見つかるし、ヘブライド諸島のひとつルイス島では、

セイウチの牙を精密に彫った十二世紀のチェスの駒が発見された。以前日本でも展示されたことがある。

各島嶼には次第に独特の秩序が形成された。すなわちマン島には王国が、オークニー諸島には公領が、アイスランドには「自由共和国」が、グリーンランドには二つの共同体が成立し、周囲の島々を支配下におさめて自治をするようになったのである。世俗の人間だけではない。

一一五二年には、ノルウェー全体の教会を統括するトロンハイム大司教座が成立していた。教会法の管轄権と人事権を握る歴代大司教は、この北大西洋の島嶼部を、ノルウェー教会の一部にしようとする。様々な画策を試みた。言語的にも文化的にもこれらの島々は、十三世紀にはすでに「輸出されたノルウェー社会」となっていた。

内乱期を終息させたホーコン四世は、この北大西洋の島々に触手を伸ばした。ノルウェーは以前から北大西洋の島々を自身の勢力圏と見なし、のちに「貢納地」と呼んだ。それは、ノルウェー人の末裔が住まう一連の小共同体が祖国ノルウェーに臣従することを当然と見なし、一種の中華思想であった。共同体の中でも臣従に利を見出す派閥とそうでない派閥とに分かれたが、一二六一年

13世紀半ば、内乱を制したホーコン四世は、北洋の島国をつぎつぎに占領、ノルウェー史上最大の版図を確立する。

ノルウェー
人物史

2

海上王国の栄華

ホーコン四世 1204～63

文 小澤実

頃にはアイスランドが、続いてグリーンランドが、毎年物資を積んだ船舶を派遣することと引き換えに——資源の少ない島嶼部にとっては死活問題である——、ホーコンに臣従の意を示した。史上稀に見る海上王国の完成であった。

こうしてホーコン四世の時代に、ノルウェーは最大版図を確立した。ベルゲンに今でも残るホーコンスハッレン（ホーコンの館の意）を建設し、一二四七年にはそこで教皇特使サビナのグリエルモから戴冠を受けた。統治拠点であるこの館を中心に、文書に基づく行政システムが王国中に構築され、船舶で各国の有力者が行き交った。王宮のあるベルゲンは、北海交易の中核として賑わう国際都市でもあった。ハンザをはじめとする北ヨーロッパの商人たちがより集まり、ホーコンの宮廷では『トリストアンとイズー』や『ロランの歌』のような文芸作品が翻案された。中世ノルウェー最大の歴史書『ヘイムスクリングラ』の著者スノッリ・ストウルルソンも、アイスランドから二度この宮廷を訪れた。歴史家たちはこのホーコン四世の治世（一二七三—一二八三）をノルウェーの「黄金時代」と呼んでいる。

アイスランドが臣従の意を示して程なく、スコットランド王アレグザンダー三世がヘブリディーズ諸島を占拠した。翌

年ホーコン四世は船隊を組み、占奪者の領土にむけて出帆した。しかしながらホーコンは一二六三年、冬営していたオークニー公領の中心地カークウォールで急死した。彼はいったん当地の聖マグヌス大聖堂に葬られた。聖マグヌスとは一一一六年頃に政敵に暗殺されたオークニー公であり、この島嶼部最大の聖人である。翌一二六四年、遺体は息子マグヌス改法王の命でベルゲンの大聖堂に船で持ち帰られた。死してなお、いかにも海上王国の支配者らしい帰還であった。

ホーコン王の記憶は、現在のノルウェー一人の間でもしつかりと受け継がれている。内戦を終わらせたホーコン王を救った二人の従者を記念して、一九三二年以来毎年三月に「ビルケベインナル・スキー競走」が開催されている。ノルウェー最

大のクロスカントリースキーで、山間部の町レナからリレハンメル（五十四キロ）を、一人を越える参加者が競う。この競走には一つのルールがある。参加者は三・五キロの袋を背負うこと。それはもちろん幼少のホーコンの象徴である。

